

かのや未来創造プログラム

平和の花束

2024

多くの若者が特別攻撃隊として
飛び立っていったこの鹿屋の地から
平和へのメッセージを世界に

平和の花束実行委員会



平和の花束 2024

目次

○あいさつ	鹿屋市教育委員会 教育長 中野 健作	2
○平和の花束2024開催内容		3
○「平和へのメッセージ」優秀作品		6
・最優秀賞・優秀賞・特別賞受賞者一覧		7
・小学校5・6年生の部		11
・中学生の部		15
・高校生の部		19
・英語部門		25
○応募作品数・応募校		26
○講評		27
・日本語部門審査委員長 上谷 順三郎		28
・英語部門審査委員長 山内 誠		30
○「平和へのメッセージ」朗読録音		33
○「平和について考える」		36
・鹿屋市から飛び立った特別攻撃隊		38
・鹿屋市の学校での平和学習		39
○鹿屋市の戦跡マップ		40
○空がなくなぐまち・ひとづくり推進協議会		41

平和への思いを繋いで

鹿屋市教育委員会 教育長 中野 健 作



太平洋戦争末期に、日本で最も多くの若者が特攻隊員として飛び立ったこの鹿屋の地から、平和へのメッセージを発信する「かのや未来創造プログラム 平和の花束」は、今年で第十一回を迎えました。戦後七十九年目となったこの夏、約三百五十人の参加者の皆様と「平和の花束2024」セレモニーを執り行うことができました。オープニングアクトとして鹿屋高等学校二年山口真由子さんによるピアノ演奏、第一部では各部門最優秀作品・優秀作品の授賞式及び最優秀作品等の朗読を行いました。また、第二部では絵本作家の浜田桂子先生をお招きし、「へいわってどんなこと」絵本で語り合う命と平和」という演題で講演を拝聴しました。

今年度寄せられた平和へのメッセージは、九州管内及び兵庫県、そして台湾から七、六五一点の作品応募がありました。それらの作品には、児童生徒が戦争遺跡や戦争体験談などに触れた体験を基に、平和や命について考えたこと、平和な未来を創るために今を生きる私たちにできることは何か、などについて自らの言葉で思いや願いが綴られておりました。児童生徒一人一人の真剣な平和へのメッセージに胸を打たれました。

令和四年度から英語部門に台湾の部を設定いたしましたところ、今年度も多くの作品が寄せられました。台湾部門最優秀者のセレモニー招待については、昨年度は台風の影響により実施できませんでしたが、今年度、計画通り実施することができました。鹿屋の地で始めた私たちの取組が海を越えて台湾へも広がり、同じ思いで繋がったことは大変喜ばしいことです。今後もこの繋がりをさらに充実させてまいります。

私たちはこれからも、戦争の遺跡や体験、それらに基づく平和への思いを若い世代に繋いでいくと共に、平和へのメッセージをここ鹿屋の地から日本全国、そして世界へ発信し続けてまいります。

最後に、「平和の花束」の開催にあたって、「平和へのメッセージ」コンテストの審査や記念誌の発刊、及びMBCラジオでの収録バスツアーや朗読放送に御支援、御協力をいただきました多くの企業をはじめ、すべての皆様に厚く御礼を申し上げます。

かのや未来創造プログラム

平和の花束2024

日時…令和6年7月30日（火）

会場…リナシティかのや3階

オープニング

○ピアノ演奏

鹿屋市立鹿屋高等学校 二年

山口 真由子さん

「ショパン作曲 バラード第3番」

○主催者あいさつ

鹿屋市教育委員会 教育長

中野 健作



主催者あいさつ



ピアノ演奏

第1部 平和へのメッセージ

「平和へのメッセージ」

授賞式・朗読・講評

○授賞式

・最優秀賞

・優秀賞

・特別賞

「空がつながまち・ひとつくり推進協議会賞」

○「平和へのメッセージ」朗読【最優秀賞受賞者】

・小学校五・六年生の部 最優秀賞

鹿屋市立西俣小学校六年 永田 眞子さん

「ランドセルから始まる平和」

・中学生の部 最優秀賞

鹿屋市立第一鹿屋中学校一年 尾迫 春斗さん

「僕だからこころ」

・高校生の部 最優秀賞

兵庫県立北条高等学校二年 堀口 璃乃さん

「今自分たちができること」

※欠席のため朗読なし



授賞式

・英語部門 最優秀賞

鹿屋市立串良中学校三年 市来 寧子 さん

「We just don't know but…」

※ 朗読ビデオ放映

・英語部門 (台湾の部) 最優秀賞

Chung-Dau Bilingual Elementary School James Wu 先生
[Striving for Peace in a World of Magic and Muggles]

・特別賞

「空がつなぐまち・ひとつくり推進協議会賞」

大分県宇佐市立四日市北小学校六年 吉用 栞 さん

「平和への想いをつないでいきたい」

・特別賞

「空がつなぐまち・ひとつくり推進協議会賞」

兵庫県立北条高等学校二年 西岡 歩花 さん

「語り継ぐ平和」

○ 講 評

上谷 順三郎 先生
(鹿児島大学教授)



講評

第2部 平和を考える

講演

演題 「へいわってどんなこと？」

（絵本で語り合う命と平和）

講師：絵本作家 浜田 桂子 氏

絵本『へいわってどんなこと？』は、日本の絵本作家が、中国・韓国の絵本作家に呼びかけ立ち上げた「日・中・韓平和絵本プロジェクト」で作り上げたもので、この絵本ができるまでの過程や絵本が出版されてから国内外の子どもたちと語り合ったことなどについて、絵本作家の浜田桂子氏が講演されました。



講演会では、浜田先生のこれまでの経験を基に、産まれてきたことに感謝することや、平和であることの素晴らしさについて、穏やかに語り掛けてくださいました。また、戦争のない平和な世界にするためには、小さな異変に気付く感覚を身に付けるとともに、私たちに世界中の多くの人たちと平和についてじっくりと語り合う必要があることを伝えてくださいました。

講演会の最後には、浜田先生のデビュー作である『あやちゃんのうまれたひ』、講演会の演題になった『へいわってどんなこと？』の二作品の読み聞かせを行い、絵本を通して改めて平和の大切さについて考える機会をいただきました。





平和へのメッセージ
優秀作品

■「最優秀賞」及び「優秀賞」受賞者（日本語部門）

	賞	学校名	学年	氏 名（敬称略）	題
小学校五・六年生の部	最優秀賞	鹿屋市立西俣小学校	6年	永田 眞子	ランドセルから始まる平和
	優秀賞	鹿屋市立寿北小学校	6年	小牟田 昊	平和について～世界中のみんなに～
	優秀賞	鹿児島市立原良小学校	6年	押川 ひかり	多様性を認め合う社会に
	優秀賞	鹿児島市立大明丘小学校	6年	山口 航汰	ぼくにとっての平和
中学生の部	最優秀賞	鹿屋市立第一鹿屋中学校	1年	尾迫 春斗	僕だからこそ
	優秀賞	鹿児島市立東谷山中学校	2年	万田 美結	幸せを写す
	優秀賞	鹿屋市立第一鹿屋中学校	2年	河野 心美	「幸せ」のバトンパス
	優秀賞	鹿屋市立輝北中学校	2年	川畑 優羽	大切な一音
高校生の部	最優秀賞	兵庫県立北条高等学校	2年	堀口 璃乃	今自分たちにできること
	優秀賞	鹿屋市立鹿屋女子高等学校	3年	山崎 梨沙子	言葉の重みを考える
	優秀賞	鹿屋市立鹿屋女子高等学校	3年	瀧川 心遥	鹿屋に生まれて
	優秀賞	鹿児島県立与論高等学校	2年	池田 こころ	笑い逢うために

■「最優秀賞」及び「優秀賞」受賞者（英語部門）

	賞	学校名	学年	氏 名	題
	最優秀賞	鹿屋市立串良中学校	3年	市来 寧子	We just don't know, but...
	優秀賞	鹿屋市立鹿屋女子高等学校	3年	野崎 ひかり	Small Happiness
	優秀賞	鹿屋市立上小原中学校	2年	池内 美貴	Echoes of Peace, from Kanoya City
	最優秀賞 (台湾の部)	Chung Dau Elementary School	5年	James Yu-Chen Wu	Striving for Peace in a World of Magic and Muggles
	優秀賞 (台湾の部)	Chung Dau Elementary School	5年	Dora Lin	A Harmonious Vision
	優秀賞 (台湾の部)	Yilan Jhong Sing Elementary School	4年	Liu Shing	The Ideal World in My Mind

■ 特別賞「空がつなぐまち・ひとづくり推進協議会賞」受賞者

学校名	学年	氏 名	題
大分県宇佐市立四日市北小学校	6年	吉用 栞	平和への思いをつないでいきたい
兵庫県立北条高等学校	2年	西岡 歩花	語り継ぐ平和

小学校五・六年生の部

最優秀賞

ランドセルから始まる平和

鹿屋市立西俣小学校 六年 永 田 眞 子

私のランドセルは、赤色だ。でも、本当は水色がよかった。そんな私の思いもむなしく「あきないから。」というお母さんの一言で赤色に決まった。少しモヤモヤした気持ちでスタートした赤色のランドセルであったが、今では六年目の相ぼうとなった。毎日のようにたくさんの教科書やノートを運んでくれている。暑い日も、寒い日も共に小学校生活を過ごしてきた。そんな小学校生活も残り十ヶ月となった。残りの十ヶ月間、この相ぼうの赤色のランドセルを大切に使おうと思う。

ある日、本を読んでいると外国の子どもがランドセルを背負っている写真が目に入った。私たち日本人が当たり前に使っているランドセルが、日本以外の国でも活躍していることをそのときに初めて知った。ランドセルが活躍している国の名前はアフガニスタン。なぜ日本のランドセルが、日本から遠く離れたアフガニスタンでも使われているのだろうか。それは、日本から使わなくなったランドセルを寄付し、アフガニスタンに送っているからだそうだ。また、送っている理由の一つに戦争があるらしい。アフガニスタンに興味をもった私は、いろいろ調べてみることにした。すると様々なことが分かった。アフガニスタンは長らく戦争が行われていることもあり、貧困家庭が

多い。そのため、生まれてから五才になる前に空腹や病気で亡くなる子どもが多く、子どもたちが当たり前に大人になるのが難しい国だ。また、だれもが学校へ通うためのかばんや文具をそろえられるわけではない。そして、学校も整備された学校とは限らない。つくえもいすもなく、地面に座って学習する学校が多くある。さらに、貧しい家庭では、兄弟全員が学校に通えるとは限らないということを知った。

私はたまに学校がめんどくさいと思うことがある。一方、アフガニスタンの子どもたちは、ランドセルを背負って楽しそうに学校に通っている。また、ランドセルはつくえ代わりにもなっている。つまり、日本からランドセルを送ることで、アフガニスタンの子どもたちは学校に行くことができ、教育を受けることができる。教育を受けることができると将来の可能性が広がり、豊かさにつながると私は考える。多くの命を救うことにもつながるとも考える。日本のランドセルは、未来の平和の始まりとなるランドセルになるのだ。

私は、家族とランドセルの七年目からのことを話し合う。海外に寄付することも選択肢の一つとして挙がっている。どうせなら人の役に立つてほしいと考えるからだ。

私は、明日も明後日もこの赤のランドセルで学校に行く。七年目から使うだけのためにも、私の相ぼうの赤いランドセルをこれからも大切に使いたい。

優秀賞

平和について―世界中のみんなに―

鹿屋市立寿北小学校 六年 小牟田 昊

みなさん、「ぼく、私は、幸せだな。」と、思ったことはありますか。私は、数え切れないほどあります。例えば、好きなことをしているときや、ゆっくりねむれるときに、私は幸せだなあ、と感じます。でも、最近、他国では、戦争などが起こっていて、幸せを感じられない人々もいるかもしれません。その人たちに、今、私たちができることはなんでしょう。私は、三つあると思います。

一つめは、人に優しくすることです。自分が優しくしてもらえると、嬉しいですよ。だから、戦争などで心や体が疲れている人々をいやすことができると思います。始めは心を開いてくれないかもしれませんが、つかれきった心と体は、これ以上つかれないように、周りのことをこばむからです。でも、私は、続けていけば、少しずつでもいやしていけると思っています。

二つめは、笑ってもらうことです。いつも辛い思いをしている人々に、一しゅんでも、一秒でも辛いことを忘れられるような時間を作れたらと思います。私は、相手が笑ってくれるなら、変顔でも、一発芸でも、なんでもしたいです。笑ってくれるままで、何万回でも何億回でもしたいです。

「『辛い』に一本線を足したら、『幸せ』になる。」

この言葉の通り、辛い心に笑いの一本線を私たちが足して、みんなが幸せになるといいですね。

三つめは、健康で安全な暮らしを実現することです。以前、ニュースで、

「空しゅうなどで街がこわれています。さらに、健康にも被害が出ているようです。不衛生な環境で、食べるものがなく、栄養失調の人々が急増し、きがに苦しむ人も少なくありません。」と、聞きました。私は、辛い思いをする人を一人でも少なくしたいと強く思いました。でも、今の私には、願うことや、募金をするくらいしかできません。だから、たくさん勉強して、しょう来の夢をつかみ取り、たくさんの人々を助けようと思います。私は、しょう来、薬ざい師になりたいと思っています。ドラマを見て、かっこいいと思ったことがきっかけですが、今は、医りよう現場の方々と協力して、苦しむ人々を助けたいと思っています。私一人の力でできることは限られています。ですが、一人一人の力は小さくても、みなさん一人一人が小さい力を出し合えば、大きな力となって、平和が実現されていくと思います。私が薬ざい師になったら、医師やたくさんの人々と協力し、国境を越えて辛い思いをしている人を救いたいです。薬ざい師になるには長い時間が必要ですが、強い気持ちをもって、夢に向かって進みたいと思います。私は、世界中のみんなが幸せで、健康で安全な暮らしができることを願います。

優秀賞

多様性を認め合う社会に

鹿児島市立原良小学校 六年 押 川 ひかり

「魂（たま）かへり、魂かへりつつ、みくにまもらむ」

私の住んでいる鹿児島市永吉には戦没者墓地があります。戦争で亡くなった七万三千六百三名がまつられています。春には桜、秋には彼岸花が咲き、季節の訪れを感じる私の散歩コースです。ぼう頭の句は、何度も何度も生き返って国を守りたい、愛する人を想い、愛する国を想い散った当時の軍人たちの切なる願いが込められています。

私は国を守るために自分の命を懸けて戦った人たちの気持ちを思うと、「本当は怖かっただろうな」「家族に会いたかっただろうな」と胸が詰まる思いがします。それと同時に、たくさん命が犠牲になる戦争を絶対にしてはいけなくと強く思いました。

戦争が終わり今年で七十九年がたちますが、今の日本は平和と言えるでしょうか。日本は憲法第九条により戦争をすることはなくなりました。しかし、殺人や差別、いじめにより命が失われていく悲しいニュースが毎日のように報道されています。昭和から令和になり戦争のない平和な時代になったはずなのに、なぜ命が失われていくのでしょうか。

一つはインターネット社会が関係していると思います。簡単に情報を得ることができ、買い物も自宅でできる便利な時代です。ユーチューブで好きな動画を見ることは私の楽しみの一

つです。しかし、SNSでひぼう中傷されて傷ついている人や命を落としてしまう人がいます。私も自分や家族が同じような被害に合ったらどうしようと不安でいっぱいになります。顔が見えなくてもスマホの向こう側には人がいることを想像して、ルールやモラルを意識した正しい使い方を心がけたいと思います。

最近、多様性という言葉を目にします。人間には個性や特性があつて、人種や性別、障がいの有無、価値観などの違いを認め合い、共に生活するという意味だそうです。多様性という言葉を知り、私に出来ることは何か考えました。友達と接する時は自分の思いを伝える前に相手の気持ちを考え、友達のいいところを見つけるようにしようと思います。それから相手の個性を認めて、思いやりの気持ちを持って関わっていききたいです。

私が思う平和は、家族みんなで仲良く暮らせること、住み慣れた場所で安心して生活できること、毎日学校に行き、先生や友達と勉強したり遊んだりできることです。日本だけではなく、世界中の人が戦争により武力で解決するのではなく、多様性を認め合い、一人一人が生きていて良かったと思える社会になってほしいです。

優秀賞

ぼくにとっての平和

鹿児島市立大明丘小学校 六年 山口 航汰

「平和とは、何だろう。」

ぼくは気になって辞書で調べてみた。すると、「戦争や紛争がなく、世の中がおだやかな状態にあること」と書いてあった。なるほどねと思いつながら、まだピンとこなかったので、近くに居た弟に聞いてみた。

「平和って何だと思う。」

「ええとね、ぼくは、毎日学校に行けることかな。」

と答えが返ってきた。ぼくは少しおどろいた。なぜなら、ぼくよりしっかりとした答えが出せていたからだ。

世界では、今でも戦争や紛争が起きていて、学校に行きたくても行けず、命を守るために、常に逃げながら暮らしている所もあるようだ。サイレンが鳴ると、のんびり食事も取れないように、ファストフード店に居た人たちが、食べ物をもそのままにシェルターへ逃げるため、床にゴミや食べかけの物が散乱している様子をニュースで見たことがある。びっくりしたのと同時に、戦争が起きている国の現実を見て、ショックだったし、悲しかった。

朝起きてから、夜寝るまでを当たり前のように過ごせる毎日がどんなに幸せなことなのか。家族といっしょに過ごせることや学校に行って友達と遊んだり、えん筆やノート、タブレットを使ったりして勉強ができることも幸せなことであると改め

て思った。

そう言えば、「にんげんっていいな」という歌があることを思い出した。それには、こんな歌がある。

いいな いいな にんげんっていいな

みんなでなかよく ポチャポチャおふろ

あったかいふとんで 眠るんだろな

ぼくも帰ろ お家へ帰ろ

この歌にある、あったかいふとんで寝ることも、おふろに入ること、幸せで、とても平和だと思った。

ぼくは、けんかや争いごとがきらいだ。けんかをした後、とても悲しくてむなしい気持ちになるのがいやだ。人を傷つける言葉も、言われたらとても苦しくなる。聞くのも同じだ。だから、けんかはしたくないし、悪口も言いたくない。学校のよいうな集団生活において、人とぶつかることはよくあることだと先生から聞いた。だからと言って、相手を傷つけていいとは決まっていない。だから、ぼくは相手に言いたいことを言うときには、傷つけるのではなく、相手の気持ちを考えて、言葉を選んで伝えるようにしたい。

このことは、小さなことかもしれないが、これが「平和」への第一歩であり、ぼくが願う「平和」なのかもしれない。毎日、元気に過ごし、笑顔で居られたらそれでいい。それがぼくにとっての「平和」である。こんな気持ちがたくさん集まったら、戦争なんて起こらないのではないだろうか。みんなの「平和」についてこれからも考えていきたい。

中学生の部

最優秀賞

僕だからこそ

鹿屋市立第一鹿屋中学校 一年 尾 迫 春 斗

「今は平和だね。」

昔、曾祖父と海を散歩しているとき、曾祖父がポツリと言った言葉をふと思い出した。

幼いころから曾祖父と僕はとても仲が良かった。近くに住むいとこと僕と曾祖父でいろいろな場所に散歩に出かけた。自然に詳しい曾祖父は、きれいな花や食べられる植物、危険な昆虫、何でも知っていた。そんな曾祖父といろいろな話をしながら過ごす時間は僕にとって最高の時間だった。

一年生の夏、曾祖父が、入院することになった。僕は、曾祖父がとても心配で病院に会いに行った。曾祖父は、僕に一度も弱いところを見せたことがない。その日もとても元気な様子で、「なんだ。元気そうじゃないか。」と心の中でほっと安心した。僕は、本当に元気だと思った。

「何で元気なのに入院しなくちゃいけないの。」と母に尋ねると、

「じいちゃんね、昔、戦争で足に弾丸が当たってもう取り出すことができないままだったんだよ。それが今となって悪化して……。だからなんだよ。」

そう聞いたときのショックを今も忘れられない。ずっと昔に起

こつたことだと思っていた戦争がこうやって長い時間をかけて人の命をむしばんでいく。戦争の本当の恐ろしさを目の当たりにしたように感じた。僕の大事なじいちゃんが、もう治らないという現実はある頃の僕にとって受け入れがたいものだった。

僕は、その時、あの日の会話を思い出した。幼かった僕が、「戦争ってどんなの」

と聞いたときのことだ。曾祖父は、

「戦争は、人々を簡単に亡くせ、苦しめることができる。」と言った。また、続けて、

「人は、一度は欲を持つんだ。じゃから、他の国は、他の国が欲しくなって戦うんだ。」

そう言って、ポカンとしている僕に向かって曾祖父は、優しく微笑んだ。僕はようやくその時の、曾祖父の思いが少しだけわかった気がした。あの時なぜ曾祖父が

「今は、平和だね。」

といったのか。

曾祖父は、亡くなる直前に僕といとこに、「平和は、いつまでも続くとは限らない。でも戦争の怖さをみんなが分かれば世界は変わるかもしれない。」

と言が残した。戦争を体験し、本当の恐怖を知っている曾祖父はもういない。これからは、僕たちが戦争の恐ろしさを伝えていかないとはいけないのだ。体験していいことを伝えることに難しさはあるだろう。しかし、元気に暮らしていた曾祖父の命を最終的にうばった戦争を僕は許せない。その最期を見届けた僕だからこそできることをしていきたい。

優秀賞

幸せを写す

鹿児島市立東谷山中学校 二年 万田 美結

私は今、椅子に座り、文を書いている。あなたは今、文を読んでいる。それは当たり前すぎることもかもしれない。でも私はこの世界に「当たり前」なんてことはない、と思い知らされた一日を体験した。

私はある青空の広がる日、長崎原爆資料館を訪れた。そこで私は人生で初めて、被爆者の方の話を直接聞く機会があった。私はその方を見たとき、私たちに向ける眼差しが何だか不思議な雰囲気をもとっているような気がした。優しいような、哀しいような、言葉では言い表せない、そんな眼差しだった。

私はいつのまにか、瞬きを忘れるほどに話に引き込まれていた。どうしても他人として話を聞くことができなかった。被爆者の方の紡ぐ言葉の一つ一つ、マイクを通して伝わる息づかいの一つ一つで当時の風景や思いが痛いほど伝わってきた。

講話が終わり、初めて感じた。自分でもまだよく分かっていない感情をそのままに、次は資料館の中を見て回った。資料館には数々の写真があった。私は想像を絶するほどの悲惨な写真を目の前にし、言葉を失った。写真は真の姿を写す。目の前の写真は長崎で実際にあった風景を切り取っただけなのだ。ただ、今の長崎の街と写真とを重ね合わせるのがどうしても難しかった。

しかし、私は心のどこかで「納得」もしていた。それは被爆

者の方の話を鮮明に覚えていたからである。そして、それと同時にあの時感じた、自分でもよく分からない感情が少しずつ理解でき、心の奥深くに溶けこんでいくような感覚になった。私がそう思ったのは、全身が黒焦げになり、倒れている人の側に立ちつくす女の人の写真を見たときが一番強かった。一つの画に生と死が写りこんだこの写真こそ、戦争や原爆といったものの、象徴なのではないか。亡くなった人だけではなく、生き残った人々も、どれだけ苦しんだか。私が全てを分かることはできないけれど、果たして、生きていた人々の心は生きていたのだろうか、と思ってしまう。その答えはきっと、言わずとも分かるだろう。

平和について考えるとき、必ずといっていいほど私たちが耳にする言葉がある。それは、「当たり前」にできていることは、当たり前ではない」ということ。私はその本当の意味が分かった気がした。明日、何しよう。夕飯何かな。いつてきます。おかえり。七十九年前、それは当たり前ではなかった。自由な夢を持てることも。大切な人と過ごせる明日があることも。

私たちは今、生きている。喜び、怒り、哀しみ、楽しみながら生きている。あの日にたくされた命で。命に優劣なんてなく、世界中の人一人ずつ、同じ価値を持っている。写真に写りこむ未来が笑顔であふれますように。青空の下、今日も願っている。

優秀賞

「幸せ」のバトンパス

鹿屋市立第一鹿屋中学校 二年 河野 心美

「いつてきます。」

六時二十五分。いつも通りの朝を迎え、自転車に乗って朝練に向かう。自転車で乗りながら見える少し薄い色のきれいな空。この毎朝が幸せであると考えようになったのは、平和学習を始めてからだった。

壁一面を埋め尽くすように飾られている顔写真。これは、鹿屋航空基地史料館に展示されている特攻で亡くなった人たちだ。

「全部、特攻で亡くなった人たち……」

どれも二十歳前後の若い男性、予想以上にたくさんの人たちが、死を覚悟して飛び立った。そう考えれば考えるほど、信じられない衝撃だった。

平和学習で、戦争についてたくさん学んでいくうちに、改めて戦争はおそろしいものだと思った。私たちの住む日本は戦争でたくさんの方が亡くなり、それによりたくさんの方が悲しんだ歴史が残っている。鹿屋市には戦争で亡くなった人たちのために、いくつかの慰霊塔が設置されている。私が知っている小塚公園にも慰霊塔があり、たくさんの方が手が合わせているところを見たことがある。戦争で亡くなった人は、あの苦しみから解放され、たくさんの方の祈りにあたたかく包まれて、少しでも報われたような気持ちになっているだろうか。

串良町の平和公園にある戦争遺跡地下壕第一電信室にやってきた。ここは特攻隊員のモールス信号を受け取っていた場所だ。

「ツー。」

この音を最後に、一つの命が去る。平和ガイドさんの説明を聞きながら、実際にこの音を聞いたとき、私はとても絶望的な気持ちになった。桜花という飛行機に乗って命を落とす人や、またこの場で電信を受け取っていた人。それぞれ、どんな思いがあったのだろうか。二度と戦争はしてはいけない、そう強く思った。

これから、平和を保っていくために私が大切だと考えていることが二つある。一つ目は相手のことを考え、言われたら嬉しい言葉をかけることだ。戦争でたくさんの方を苦しめた人ほど、そのようなことを考えていたのか。自分の身内が傷付く、亡くなる、そのようなことを考えると、そんなことをしたくはないと思う。常に相手のことを考えていきたい。

二つ目は、差別をしないことだ。みんな平等にされることで私は毎日を気持ちよく過ごすことができると思う。みんな平等に接し、差別をしないことを大切にしていきたい。

連休中に、慰霊塔のある小塚公園に姉と向かった。今までとは考えられないほど強い思いで手を合わせた。終戦から七十九年たった今、たくさんの方が命を犠牲にし作ってくれたこの幸せが一生続くように。幸せのバトンをつないでいくのは、私たちだ。

優秀賞

大切な一音

鹿屋市立輝北中学校 二年 川 畑 優 羽

今、地球上ではたくさんの人が意味のない争いごとに巻き込まれている。きっとその人たちは心の中で「助けて。助けて」とつぶやいている。私は今回、見て、触れて、改めて知り直した。恐ろしい出来事について。それが、「戦争」だ。

私に通っている学校は一年に一回、校外学習がある。そして今回のテーマが「平和学習」だった。私はこの時、「あー、おもしろくなさそう」と思っていた。そして、校外学習当日になった。この日だけで、鹿屋航空基地史料館をはじめとする六か所の戦争に関わる戦跡などを見て、触れた。この平和学習では「特攻隊」にスポットライトが当てられた。私の中のスポットライトは串良にある地下壕第一電信室で聞いたモールス信号だった。私はモールス信号という言葉すら聞いたことがなかった。せつかなので、モールス信号について調べてみることにした。すると、便利なものであるということだけは、なんとなくではあるが分かった。しかし、地下壕第一電信室で聞いたモールス信号は恐ろしく思え、便利なものという素敵な一面がかき消されているように感じた。この時に聞いたモールス信号は、私にとって刃のようなものだった。その刃が私の心にグサグサと、そこらじゅう、何も関係なく刺していたようだった。また、ひどく心に染みるような音だった。特に最後の「ピー」という音は。この音は長さもバラ

バラで、特攻隊に選ばれた人々の強い意志を感じた。このモールス信号は今では飛行機などに使われる「便利な道具」という一面があるが、戦争中の日本では、心を切り刻んでしまう武器だったのだ。そんな残酷な音は今でも私の頭の中でずっと鳴り続けている。一度しか聞いていないのに頭に残るなんて。毎日、聞いていた人の気持ちを考えると心が痛む。この音を聞くだけでも心が痛むのに、これが友との最後の会話だと思いがら聞いている方々の気持ちは、とても想像もつかない。きっと、私とその立場だったら、現実から逃げ出したくなっているだろう。しかしこの時代に生きた人たちは「お国のために」と思いながら様々なことを我慢していたのだ。この人たちは、勇者だ。この人たちの願いを尊重するためにも、日本は、世界各国は「意味のない争いごとはやめましょう」そして、「助けてと SOS サインを出している人たちに耳を傾けてみませんか」と勇気を出して言うことだってできる。ただ見守るだけでなく、自分たちの経験を生かし、救いの手を差し出すことができるのではないのだろうか。さあ、みんなで脱出しよう。争うという考え方から。みんなで協力・助け合いだ。がんばるぞ。

高校生の部

最優秀賞

今自分たちに行けること

兵庫県立北条高等学校 二年 堀 口 璃 乃

私は、現在高校の活動で兵庫県加西市にある鶉野飛行場のガイドボランティアを行っています。今年で二年目になりますが、その過程で白鷺隊について多くのことを知りました。

その一つは遺書についてです。最初私は、特攻に対して恐怖を抱いていたとしてもその思いを書くことができず、家族にありがとうと伝えることが精一杯であったと聞いていました。しかし、そのことは実際に公開されている遺書を読んで初めて実感しました。もっと詳しく調べてみると上官による検閲のため、本音であったとしても心の内の全てが書かれているとは限らないそうです。また、白鷺隊についても志願制ではあるが、事実上の強制だったという話があり、拒否したいとはとても言えません。防空壕のガイドで毎回上映している動画にて、白鷺隊の隊長である佐藤大尉の遺書が読まれるのですが、立場的にも特攻隊に志願する必要がなかったのにも関わらず、若い者だけを行かせることはできないと自ら先頭を切つて特攻に向かわれたそうで、そのような時代背景の中で勇気ある、とても凄い行動であると思いました。佐藤大尉は最年長ではあるが、まだ三十九歳で失うには早すぎる命でした。若い人であれば年齢は私たちとさほど変わりません。だからこそ、こ

の作戦の異常さがこの歳になってより感じます。結果として特攻の成功率は非常に低く、意味のない死をたくさん生み出してしまった後悔すべき行為です。現代ではこのような捨て身の作戦はもうありませんが、戦争が行われている限り、戦わざるを得ない者や突然幸せを奪われてしまう者は絶えません。私は今までに戦争体験者にインタビューをさせていただいたり、鶉野ミュージアムのスタッフにお話を伺ったり、ガイドツアーに訪れたお客さんにも別の地でのお話など伺ってきました。そのように色んな活動を通して戦争について知識を深めてきましたが、やはり多くの人が

「戦争は良くない。平和で自由な世界がいつまでも続いて欲しい。」

と言います。私自身も戦争はなくなるべきだと思っています。「戦争はなぜ起こるのか」それは人間が学ばないからだとは思いますが、その一方で戦争によってどのような悲劇がもたらされ、それがどれだけ愚かなことであるかを知って欲しいです。多くの人が戦争について知ることが平和への第一歩だと考えています。私は活動に参加するまで本当に何も知りませんでした。現代の多くの人はその頃の私と同じだと思います。終戦を迎えてからかなりの年月が経ちました。戦争体験者の生の声を聞くことができるのは、もう今だけです。私たちも精一杯伝えていきます。一度でも良いのでこの鶉野の大地まで足を運んで隊員たちの軌跡を実際にその目で確かめてみてください。そして、戦争のない平和な世界を一緒につくっていきませんか。

優秀賞

言葉の重みを考える

鹿屋市立鹿屋女子高等学校 三年 山崎 梨沙子

「おめでとうございます」

この言葉を聞いて、頭の中でどのような光景が浮かぶだろうか。誕生日、大会での勝利、試験の合格など、多くの人は前向きでポジティブな場面が思い浮かぶだろう。嬉しいことや特別なことがあったときに聞くはずのこの言葉に、苦しさを感じるとしたら、どんな場面があるのだろうか。

現代では、思っていることや感じたことを素直に伝えたり、意見することができる時代である。嫌なことは嫌いといい、好きなものを好きと言える時代である。しかし、八十〜百年ほど時代を遡ってみるとどうだろうか、自由に言いたいことを言えたのだろうか。私はドラマで戦争の場面を見た。そのドラマでは、若い男性に対して、赤紙と呼ばれる臨時召集令状である一枚の紙が手渡しで届き、出征を知らせているシーンが放送されていた。その中で、出征が決まった男性が、赤紙が届いたことを家族全員に知らせたとき、家族や近所の人々が口にしたのは、「おめでとうございます」であった。しかも、おめでとうと言っているのに苦しそうで、悲しそうな顔を見て、私は、一瞬困惑してしまった。出征が決まり、家から出て危険な目に合うかもしれない人に対して、なぜおめでとうと言ってしまうのか。私は、今では信じがたいその光景が、実際に日本で起きていたと考えると、とても違和感があり、怖かった。「お国のために戦う」

ということを重視していたために、「おめでとう」と言っていたという記事も読み、戦争時代と現代との価値観の違いを感じた。私は、この出来事から、言葉の重みを感じた。戦争がある時代と現代では、状況や価値観も大きく変わっている。自分の意見や考えをSNSや学校など多くの場所で主張できる。しかし、自分の意見や考えを一方的にぶつけてはいけない。このような社会だからこそ私は、多くの人がお互いを思いやり、言葉の重みを理解し、よく考えて自分の意見を言うことができる世の中になってほしいと強く感じる。

私の思う平和は、お互いを思いやることができる世の中であることだ。日々の生活の中で、相手を傷つけたり、悲しませてしまう言葉遣いを投げかけてはいないだろうか。第三者として見たときに、傷つけられている人はいないだろうか。今一度、周りを見渡し、自分を見つめ直して、良い関係を継続できるように振り返ってみてはどうだろうか。そうすることで、お互いを思いやる「平和な世界」をみんなで目指すことができるのではないか。平和な世の中にするためのヒントは、日常の中にあると思う。私自身もその時その状況に応じた言葉の使い方ができているかを振り返り、相手を思いやることのできる行動を心掛けたと思う。平和な世の中にするために自分の行動をもう一度見直してみようではないか。

優秀賞

鹿屋に生まれて

鹿屋市立鹿屋女子高等学校 三年 瀧 川 心 遥

先日、北朝鮮がミサイルを放ち、沖縄では警報がなった。そのニュースを聞いたとき、背筋が凍った。一瞬で当たり前の日常が無くなってしまふと考えるととても怖くなった。そのニュースを見て自分にも危険があると知ったことで、それまであまり考えてこなかった平和について意識するようになった。私は今まで、平和ではない状況を経験したことがない。世界各地で戦争や紛争が起こっているというニュースを見たり聞いたりしているだけで、戦争や紛争で困っている人や、苦しい生活を送っている人がいるということが実感できなかった。

私が生まれた鹿屋は七十七年前の太平洋戦争で重要な役割を果たしていて、航空基地史料館があったり、防空壕や地下壕が残っていたりする。私も何度かそこを訪れたことがある。史料館には、特攻隊員として飛び立っていった私と同年代の人の遺書や遺影などが数多く残されている。それを見て私は、今は自分の進路や生き方について自由に選択することができるが、当時はそんなことも許されなく、もし自分がその立場だったら本当に辛いだろうなと思った。地下壕には飛び立った特攻隊員が突撃する前に送る電信を受信するための地下電信室がある。モールス信号の再現を聞いて、当時これを聞いた人は、恐怖や寂しさを感じながら自分が飛び立つのを待っていたのではないかと思った。平和公園には太平洋戦争のとき滑走路として使

われていた、長く、真っ直ぐな道路がある。今では、春になると桜が咲き、まさに平和を表しているように感じる。しかし、それと同時に寂しさも感じる。この道路の細さが飛び立ったら帰って来られないことを表しているように感じるからだ。鹿屋の戦跡から、私は戦争の悲惨さだけでなく、私の同年代の人が未来が戦争により簡単に失われてしまったことが本当に悲しく、辛いことだと感じた。

平和とはなんだろうか。辞書で調べてみると、「戦争や紛争がなく、世の中が穏やかな状態にあること。また、そのさま。」とでてきた。しかし、私は平和とは戦争がないことや全員が安全に暮らすことができるということだけではないと思う。世界中の人々が幸せになるチャンスがあるということだけではないうと思う。「幸せは自分で掴むもの」とよく言うが、幸せになるチャンスがなければ、なろうと思ってもなれない。世界中の人々がそれぞれの幸せや希望を描き、それが実現できるように世界になればいいと思う。

優秀賞

笑い逢うために

鹿児島県立与論高等学校 二年 池 田 こころ

「平和とはなんだろう。考えてみよう。」

小学生のころ、誰もが一度は受けるであろう平和についての授業に私は消極的でした。戦争を知らず、今が当たり前だと考えていたため、平和の重要性がわからない子どもだったのは自覚しています。母に毎朝起こされ妹たちと学校へ向かい、夜は父にドライブへ連れて行ってもらう日々の、この何気ない時間が壊されることのない一生物だと自分なりに解釈していたからだと思います。しかし、そんな日々は一瞬にして消え失せるという事実を小学四年生のとても寒い冬の日に痛いほど思い知りました。

私の父はよく突拍子もないことを言う人です。あの日も「よし、行くぞ」の一言で車に乗り込み、出発しました。着いた先は知覧特攻平和会館。まだ幼い私は入口の大きな絵を見た瞬間怖くなり、父に言いました。「早く帰りたい。もう嫌だ。」今でもはつきり覚えているのです。これまでにないような心の苦しみです。泣き叫びたくなるような、体の芯までが冷える感覚です。

父は勿論帰らせてくれるわけもなく、私は母の後ろで隠れるように前に進みました。目に飛び込んできたのは一人用の飛行機。数え切れない若者の写真。手紙。衝撃が隠せなかったです。ビデオを観て、館長さんの話にも積極的に耳を傾けま

した。あんなに帰りがついていたはずの私は率先して観て回り家に帰ってから忘れることはありませんでした。脳に焼きつき、消えなかったです。

それから七年経った今。私は日本の終戦の日の八月十五日に近づいて来るほど、あの日の恐怖を強く思い出しています。また、成長するにつれて沢山の事実を学んできました。ヒロシマとナガサキに投下された原子爆弾。東京大空襲。日本唯一の沖縄大陸戦。恐ろしさや戦争の必要性については深く考えることができましたが、私たちが住む日本での出来事なのにどの実事にも実感が湧きませんでした。でもそれでもいいと考えています。なぜなら戦争は過去の出来事。今の世の中に不要で、伝えていくべきことから。

しかし、こんな時代にもかかわらず戦争は起こっています。人の尊い命だけでなく夢や希望まで根こそぎとる戦争は必要なんですか。同じ惑星に生まれ、言葉で意思疎通ができる人類同士が爆弾を打ち落としていく姿はあまりにも皮肉過ぎると思いますか。

いつもと変わらない日々がなによりの平和です。世界のどこにいる人にも与えられています。この文を書こうと思ったきっかけも、自分だけの正義で動き、戦争となっていてはおかしさをより多くの人に感じてほしいと思ったからです。今だけではなく、これからの未来を生きる人類すべてに幸せで溢れるように私は色々な手を使って発信していきます。いつの日か、みんなが幸せだねと笑い逢うために。

英語部門 – 最優秀賞 –

We just don't know, but...

Kushira Middle School 3rd Grade
Nene Ichiki

“Why do I have to learn this?” I always thought about it social class. There are probably many other students like that. I'm especially bad at history. This is because it difficult to memorize the names of historical figures or to remember what happened in what year.

I also learned about the World War II in a social studies class. It began in December 8, 1941. The Japanese army made a surprise attack on Pearl Harbor in Hawaii and landed on the British Malay Peninsula. Four years later, atomic bombs were dropped on Hiroshima on August 6 and Nagasaki on August 9, 1945. Then, on August 15, Emperor Showa declared defeat to the people, and the war ended. My social studies teacher taught us so. I always try to fight off sleepiness in social studies class, however, I concentrated on the class. This is because I knew about what was going on at that time.

My great-aunt was nine years old at the time of the war. She remembers those days well and often told me about them. One day, she was working in the fields with her family. Suddenly, she heard a roaring sound from the sky. She looked up and saw American planes flying over head. She hid in the bushes, holding her breathe and she was waiting the plane to pass. At that moment, a bullet line was drawn right next to her with a loud sound. She didn't understand what happened at first, but she was seized with fear after the planes had gone. She said that she could have been killed. When I heard about it, I was very shocked and my body trembled.

I've been thinking what she told me while taking the social studies class and I realized that what I read in the textbook was only part of history. We just don't know, but actually lots of different lives were being lived behind the scenes. By looking into the lives of each of them, and imagining their feelings, we can better understand the war. I mean that we should understand that the war is not only a historical event, but also the fact experienced by many Japanese people. I think that we should learn it never to repeat wars.

Then how can we learn about the people who lived during the time of war? In fact, there are many places to learn about them in Kanoya City. For example, we have the Kanoya Air Base Museum. We can read the letters written by the members of the Special Attack Force who flew out of Kanoya. We can also see the photographs of those who died in the operation. In Kushira, where I live, there is the Peace Memorial Park. There is a memorial tower and the remains of the runway for the Special Attack Force. If you visit these place you will know the feelings of the members who had to die and the people who had to see them off.

Have you ever been to those places? Kanoya has many remains of the war. I think we, people living in Kanoya have to go there and learn about the people who lived in the war. You just don't know, but we are the ones who can pass the wish for peace to the next generation. I belive that our small steps will lead us to the peaceful future. Why don't you believe it and take the first step?

市来さんは、社会科の授業で学んだ第二次世界大戦について、単なる教科書の内容だけではなく、実際に戦争を経験した人々の生きた証として深く理解するべきだと述べています。市来さんは、大叔母の戦争体験の話から、戦争は個々の命と関わりがあることを実感し、戦争の事実を学ぶことが平和を築くために大切だと考えました。また、平和を未来に伝えていくためにも、鹿屋市の戦跡や史料館を訪れ、戦争を生き抜いた人々の思いも感じる必要があると呼びかけています。

平和の花束実行委員会による要約

英語部門 – 優秀賞 –

Small Happiness

Kanoya Girls' High School 3rd Grade
Hikari Nozaki

Are you sharing your happiness?

For me, peace means being able to share small happiness with many people. My father is a member of the Self-Defense Forces, and protects Japan's territory, territorial waters, and airspace from various dangers and disasters.

Sometimes people say that the Self-Defense Forces are a threat to the Constitution, or they waste our tax money a lot, and others say that the Self-Defense Forces are unnecessary. However, if there were no Self-Defense Forces, there would be no one to protect us when we are attacked by other countries, and there would be no one to rescue us when disasters occur. In Japan today, we are able to live a peaceful life because we have a lot of help and protection from the Self-Defense Forces and police officers.

Many wars are still occurring in the world, such as the invasion of Ukraine, the conflict in Afghanistan, and the civil war in Syria. It has been seventy years since the war ended in Japan. Though 193 countries belong to the United Nations now, there are only eight countries that have not experienced war since 1945, including Japan.

Learning about this situation, I thought about why wars and conflicts do not disappear in the world. I have had opportunities to learn a lot about war through history class and field trips. From what I learned, I believe that the reason why wars occur is that many people attack each other for their own interests. However, I thought that we could reduce the number of wars by just doing two things: opening our hearts to each other and following the rules. This is because the current state of the world is that people do not express their thoughts or engage in discussion, but instead try to solve problems by force. And, when they invade a defined area, such as territorial waters, or when someone fails to follow the rules, they immediately start a war. That's why I think it's so important to open up to each other and follow the rules.

Also, I thought about what I can do now. I cannot stop wars or get rid of weapons in the world. However, when I think about the peace that surrounds me, there are many things I can do in order to bring smiles around me. For example, I can raise money to help people in need around the world, and give a hand to people who are in trouble. What I can do right now is only a little bit, but I would be happy if the world could become a better place to live. So, I think we need organizations such as the Self-Defense Forces that always protect and help people. I'm proud of my father's job.

Now, I can live safely, and I can enjoy spending good time with people close to me, and I can feel a little happiness in my life. Everyone should feel their own happiness and share their happiness with people around them. I would like to live my life with gratitude, without forgetting that many people around the world support our peaceful daily lives. Small happiness will lead to world peace someday.

野崎さんは、平和とは小さな幸せを多くの人と分かち合うことだと考えています。世界では未だに戦争や紛争が続いており、その原因の多くが、自分の利益のために争っていることを知った野崎さんは、お互いに心を開き、ルールを守ることで戦争を減らせるのではないかと考えました。野崎さんは最後に、平和な未来の実現に向けて、世界中の人々が感謝の気持ちを持ち続けることが大切であると呼びかけています。

平和の花束実行委員会による要約

英語部門 – 優秀賞 –

Echoe's of Peace, from Kanoya City

Kamiobaru Middle School 2nd Grade
Miki Ikeuchi

Growing up in the serene town of Kanoya City, nestled in the heart of Kagoshima Prefecture, Japan, I was enveloped by a landscape that beautifully juxtaposed natural splendor with a poignant historical backdrop.

Kanoya is renowned for its roses and tranquil scenery, yet it bears the enduring scars of wartime. The runways, silently etched across the farmland near picturesque coastlines, once served as the tragic final path for young Kamikaze pilots. As a child, I innocently played on these historic runways, shielded from the distant echoes of warplanes by nearby water slides and flowing swimming pools.

One indelible memory remains etched in my mind: my father's rare display of emotion as he drove me along the runway, recounting the sacrifice of innocent Kamikaze pilots, some as young as seventeen, whose dreams were cut short. His voice trembled with the weight of history, leaving an indelible mark on my understanding of war and sacrifice.

Now, as a middle school student, I grasp the profound significance of those runways—they symbolize our community's evolution from a past marred by conflict to a present dedicated to peace. This transformation is vividly echoed at the Kanoya Air Base Museum, a beacon of peace education that urges visitors to contemplate the futility of war and the imperative of mutual understanding.

Peace is an ongoing pursuit that necessitates resilience, education, and collective effort. Our community exemplifies this commitment through the dedicated efforts of local schools and the esteemed National Institute of Fitness and Sports. They actively promote values of peace and harmony among our youth and athletes through local sports activities, fostering an environment where mutual understanding thrives and residents contribute to a harmonious society.

My story isn't merely mine—it resonates with everyone. Understanding our history of conflict is crucial for navigating global challenges. These narratives teach us that peace requires not just diplomacy and negotiations, but also a deep-seated commitment to mutual understanding and compassion across divides. The lessons learned, from honoring the past to actively building a peaceful future, carry profound implications worldwide. Peace isn't just the absence of conflict; it's an ongoing endeavor that demands our unwavering dedication and collective action.

In today's world, marked by persistent geopolitical tensions and unfolding humanitarian crises, such as the conflict between Ukraine and Russia, and the ongoing situation between Israel and Palestine, our journey offers a beacon of hope. By acknowledging our shared humanity and learning from history, we can collectively strive for a better world where peace prevails universally. I urge everyone to actively pursue peace, engage in dialogue, participate in peace-building initiatives, and educate future generations about the value of harmony and understanding. Together, we can turn the dream of peace into a living reality.

Let us heed this message and tirelessly strive towards a world where peace prevails – a world where every individual, young or old, can live in the embrace of nature's beauty, free from the shadows of war. Together, our collective efforts will pave the way for a brighter future.

池内さんは、身近にある特別攻撃隊が出撃した滑走路の意味や父から聞いた戦争の話を通して、戦争の無益さと平和の大切さを訴えています。池内さんは、平和な社会にするためには過去から学ぶことが大切であり、今日の世界で起きている紛争にもその教訓が生かせると考えました。戦争のない明るい未来を切り拓くためには、平和を追求し、次世代にその価値を伝えることが重要であると呼びかけています。

平和の花束実行委員会による要約

英語部門台湾の部 - 最優秀賞 -

Striving for Peace in a World of Magic and Muggles

Chung Dau Elementary School Fifth grade

James Wu

As I put the VR headset on, I was startled by a hissing sound that came from the right. Turning, I found myself immersed in a scene: Harry Potter and his companions engaged in a fierce battle against Voldemort and his followers. Spells crackled through the air as they fought fearlessly to defend Hogwarts from the forces of darkness.

After the dust settled, Voldemort was defeated. I rushed to embrace Harry, to thank him for bringing peace to Hogwarts once again. Where wizards have the freedom to roam and play once more without the threat of conflict and violence plaguing their thoughts. Where laughter can be heard throughout the hallways and joy radiates from the smiles of everyone.

But instead of joy, Harry seemed troubled. "Are you worried that Voldemort might return?" I asked.

"It's not Voldemort I'm concerned about," Harry confessed with sorrow. With a wave of his wand, we were teleported to a battlefield, where the roar of gunfire and explosions filled the air. The school was in ruins, with its walls destroyed by bombs and countless bullet holes. Children, as young as me, holding rifles instead of books or wands, I couldn't see any happiness on their faces.

With tears in Harry's eyes, he sobbed "The muggle world is fascinated with weapons, and that worries me. Even though we wizards have our powers, muggle weapons can keep at war instead of keeping the peace. "

"I understand," I murmured. "Hundreds of thousands of innocent lives were sacrificed for the greed of those who seek more power. " "But what can I do? I'm just a kid!" I wondered aloud, feeling helpless in the face of such a difficult situation.

"Peace in our world means more than just no fighting; it's about fairness and listening," Harry explained, sounding sure. "Even kids like us can do good things by being nice and understanding. We should try to make friends and make peace wherever we are. " Harry was right! His words inspired me, so I decided to help spread his message of hope and kindness. Feeling more determined, I waved goodbye to Harry and took off the VR headset, coming back to the real world.

When I went outside, a breeze brought the nice smell of flowers and I heard birds singing. At that moment, I felt a glimmer of hope for a brighter future, where conflicts could be resolved not with violence, but with understanding and cooperation. If competitions between countries must exist, they should only be competitions like the World Cup, the Olympic Games, or Quidditch in Hogwarts and not war.

In this imperfect world of ours, we know that achieving peace won't be easy. But as Harry had taught me, even the smallest actions could have a ripple effect, spreading love and compassion to all corners of the globe. And so, if we have courage in our hearts and a clear vision of a better world in our minds, we can embark on our journey towards peace, knowing that together, we will make a difference.

VR ヘッドセットを装着した James さんは、ハリー・ポッターから「平和とは単に争わないことではなく、親切や他者理解を通じて人々と協力することが大切である」と教わります。James さんはその言葉に勇気をもらい、平和な未来を作るために、愛と思いやりを広めることができるよう、前向きに行動していくことを決意しました。 平和の花束実行委員会による要約

英語部門台湾の部 - 優秀賞 -

A Harmonious Vision

Chung Dau Elementary School 5th grade

Dora Lin

Peace is more than just a word; it's an idea that touches every part of our lives, from how we treat each other to how we care for nature. To me, peace means living in harmony where people, nature, and society grow together. My idea of peace includes understanding, cooperation, and respect.

Peace starts with understanding. When we try to understand others, we build empathy and kindness. Understanding comes from listening and learning about different cultures and viewpoints. Every summer vacation, when participating in YMCA activities, I meet friends from different countries. When sharing our traditions and experiences, we find that we have a lot in common despite our differences. For instance, learning about the Japanese tea ceremony from a friend taught me patience and mindfulness. These experiences help us realize our commonalities, creating a sense of community. Understanding helps break down prejudices and stereotypes, allowing us to see the humanity in everyone.

Cooperation is crucial for peace. It means working together towards common goals. In school, group projects teach us teamwork, contributing our strengths, and supporting each other. This spirit of cooperation builds trust and respect. On a global scale, for example, the Covid-19 pandemic showed how countries can unite to tackle a common threat. Nations donated masks, medical supplies, and vaccines to those in need, demonstrating the power of working together. When countries shared resources to fight the virus, they helped save lives and eased suffering worldwide.

Respect is the foundation of a peaceful society. It means recognizing other's right, valuing their opinions, and treating them kindly. This extends to all living beings and the environment. When we respect nature, we protect it for generations. Respect also means standing up against injustice. Once, I saw a fellow student being bullied and I stood up for him. This reinforced the importance of respect and kindness in our school.

An example of respect in action is my family's tradition of volunteering at local community centers. Every time I join my mother in community service, I spend time with the elderly. One memorable moment was when I helped an elderly man make a paper crane despite his shaky hands. In the end, he successfully completed it. His eyes lit up with joy, and I felt a warm sense of accomplishment. Helping those in need shows respect for their dignity and humanity. These small acts of kindness contribute to a larger culture of care and support within our community, reminding us that peace can be created through everyday actions.

In conclusion, I believe peace comes from understanding, cooperation, and respect in how we treat others. By making small changes in how we act and think, we can create a positive impact that spreads globally. Peace starts with each of us, and together, we can create a future where everyone lives happily together. Let's start today by embracing these values in our own lives and inspiring others to do the same.

Dora さんにとって平和とは、理解、協力、尊敬を基盤とした生活を送ることです。平和はまず他者を理解し、異なる文化や視点を学ぶことから始まります。また、協力は共通の目標に向かって行動すること、尊敬は他者の権利や意見を認めることです。Dora さんは、これらの価値観を大切にしていくことで平和は広がり、世界中でより良い未来を築いていけると考えました。

平和の花束実行委員会による要約

英語部門台湾の部 - 優秀賞 -

The Ideal World in My Mind

Yilan Jhong Sing Elementary School, Taiwan 4th grade

Liu Shing

When it comes to the ideal world in my mind, I hope that someday in the future, no matter what your skin color is, everyone can travel to his or her destination instantly, just like Doraemon and his friends did in comic books and movies. There will be limitless delicious food and fun toys everywhere. People will be smiling, chatting, and enjoying each other's company. What a wonderful picture that would be!

I love stories about space travel very much, and one of my favorite stories is *Howl's Moving Castle*, in which Howl and Sophie can be relocated to a new place in a blink if the bar next to the door is switched. I watched *Howl's Moving Castle* at school once, and I was deeply touched by its plot and theme. In the movie, two countries start a war over a missing prince who is turned into a scarecrow by magic. The director, Miyazaki Hayao, hopes his movie can tell the audience that wars bring no profit to human beings and, thus, peace should be cherished and maintained by all humans in the world.

Mr. Miyazaki's animation made me realize how horrible war is. It causes famine, death, separation and homelessness. No one is a winner in a war. Only peace allows people to live happily and work peacefully.

To accomplish a great thing, one must start from small. Therefore, all eleven children in my class help each other and keep the learning environment clean and safe. When someone has a birthday, we celebrate it with a party and cards. We also discuss homework and play games together in order to establish a strong friendship among us. If we come across an argument or a disagreement, we do not argue or fight as we believe open discussions are more effective in solving problems and resolving disagreements.

Today, international transportation is very convenient, and people can easily reach a different city or country. This makes the world like a global village. In my mind, different countries are just like relatives and friends. If one country is devastated by a natural disaster, such an earthquake or a flood, and needs help desperately, all the countries which are capable of offering help should reach out to help the country in need. This will thus create a wonderful, prosperous, and united world, just like what Confucius once said "Great Unity of the World".

Liuさんの理想の世界は、肌の色に関係なく誰もが簡単に目的地に行け、美味しい食べ物や楽しいおもちゃが無限にあり、皆が笑顔で過ごすことができる世界です。Liuさんは映画「ハウルの動く城」から戦争の恐ろしさを知り、平和こそが大切だと実感しました。平和な社会を実現するためにLiuさんは、小さな行動から始めること、互いに助け合うこと、意見を尊重することが大切であると考えました。

平和の花束実行委員会による要約

平和へのメッセージ応募作品数・応募校

1 応募校・作品数

	応募校数 (校)	応募作品数 (点)
小学校 5・6年生の部	36	1,643
中学生の部	20	1,787
高校生の部	3	39
英語部門 (日本からの応募)	5	14
英語部門 (台湾からの応募)	10	4,168
計	74	7,651

2 応募校

(日本語部門)

【小学校】 (市内23校、県内(鹿屋市は除く)9校、県外4校 合計36校)

鹿屋市立鹿屋小学校	鹿屋市立祓川小学校	鹿屋市立東原小学校
// 笠野原小学校	// 寿小学校	// 寿北小学校
// 田崎小学校	// 西原小学校	// 西原台小学校
// 花岡小学校	// 野里小学校	// 大始良小学校
// 南小学校	// 西俣小学校	// 高隈小学校
// 大黒小学校	// 輝北小学校	// 串良小学校
// 細山田小学校	// 上小原小学校	// 吾平小学校
// 鶴峰小学校	// 下名小学校	
鹿児島市立田上小学校	鹿児島市立前之浜小学校	鹿児島市立大明丘小学校
鹿児島市立原良小学校	霧島市立国分小学校	霧島市立溝辺小学校
南九州市立宮脇小学校	出水市立野田小学校	龍郷町立秋名小学校
大分県宇佐市立八幡小学校	大分県宇佐市立駅館小学校	大分県宇佐市立四日市北小学校
大分県宇佐市立柳ヶ浦小学校		

【中学校】 (市内12校、県内(鹿屋市は除く)8校 合計20校)

鹿屋市立鹿屋中学校	鹿屋市立鹿屋東中学校	鹿屋市立第一鹿屋中学校
// 田崎中学校	// 大始良中学校	// 花岡中学校
// 高隈中学校	// 輝北中学校	// 串良中学校
// 細山田中学校	// 上小原中学校	// 吾平中学校
鹿児島市立東谷山中学校	鹿児島大学教育学部附属中学校	伊佐市立大口中央中学校
肝付町立岸良学園	長島町立長島中学校	南大隅町立根占中学校
薩摩川内市立祁答院中学校	天城町立北中学校	

【高等学校】 (市内1校、県内(鹿屋市は除く)1校 県外1校 合計3校)

鹿屋市立鹿屋女子高等学校		
鹿児島県立与論高等学校		
兵庫県立北条高等学校		

(英語部門)

【小・中・高】 (市内4校、県内(鹿屋市は除く)1校、台湾10校 合計15校)

鹿屋市立大始良中学校	鹿屋市立串良中学校	鹿屋市立上小原中学校
// 鹿屋女子高等学校		
伊佐市立大口中央中学校		
N T U E E E S	Chung-Dau Bilingual ES	Y i x u e E S
Mandarin Experimental ES	S h u a n g y o n g P S	W a n d a E S
M i n g h u P S	J h o n g - S i n g E S	L o n g m e n J H S
P i n g l i n E S		

講 評 (日本語部門)

鹿児島大学教授 上 谷 順三郎



今年も平和の花束として多くのメッセージが寄せられました。今の世の中はどうなっているでしょうか。ウクライナへのロシアの軍事侵攻は長期化しています。イスラエル・ガザ地区の戦争も続いています。日本では能登半島地震や大雨などによる被害のニュースが続いて報道されています。また鹿児島では新型コロナウイルス感染症の第十一波について報じられました。そして、夏が早くから始まって記録的な猛暑で参ってしまいそんな毎日です。こんな生活の中ですが、「平和のメッセージ」を通して、私たちは過去から今へ、そして未来へとみんなで希望をつないで生きていきたいと思っています。

【小学校5・6年生の部】永田眞子さん 題名「ランドセルから始まる平和」

平和について考えるきっかけや、平和についていつから、何から始めることにするのか、など平和との関わりはさまざまです。永田さんにとってそれは6年目の相棒、赤い「ランドセル」だったのです。ランドセルがアフガニスタンで活躍していることを知って、自分の相棒の赤いランドセルにも人の役に立って欲しいと思うようになったことが書かれています。もやもやとした気持ちで使い始めたランドセルとの付き合い、アフガニスタンのことを調べてわかったランドセルの役目など、ランドセルのおかげで戦争や貧困のことが具体的なこととして感じられるようになったようです。日本のランドセルが未来の平和の始まりとなるだろう、と永田さんの希望が語られています。

【中学生の部】尾迫春斗さん 題名「僕だからこそ」

作文にとって、題目、タイトルともいいますが、題目はとても大事です。読む人はその題目から内容を予想しながら読みます。尾迫さんの作文は、「僕だからこそ」という題目が全体を貫いていて、作文の最後までしっかりとつながっています。「なるほど」と納得して読み終わった作文です。作文の出だしの「今は平和だね。」というひいおじいさんの言葉もあとにつながっています。ひいおじいさんとのやりとりやそこでの言葉がいかに尾迫さんにとって大切なことなのか強く伝わってきます。「戦争の本当の恐ろしさ」を教えてくれたひいおじいさんは、亡くなる前に「戦争の怖さをみんなが分かれば世界は変わるかもしれない」という言葉を残します。尾迫さんだからこそできること、私たちだからこそできることを見つけていきましよう。

【高校生の部】堀口璃乃さん 題名「今自分たちにできること」

堀口さんが今やっていることは、兵庫県加西市の「鷗野飛行場」のガイドボランティアです。そこで「白鷺隊」という特攻隊について知ることになります。自分と年齢の変わらない若い人の遺書のこと、白鷺隊の隊長でありながら志願した三十九歳の佐藤大尉のことなど、その時の作戦がいかに異常なことであつたのかを痛感することになります。堀口さんは戦争体験者からも話を聞くことができたようです。また鷗野ミュージアムのスタッフやお客さんからも戦争の話を聞くことがあるそうです。戦争が起こるのは「人間が学ばないからだ」と思う、と堀口さんは書いています。戦争の悲劇、その愚かさを多くの人に伝えたい、知ってもらいたいという強い思いを抱いて、堀口さんは二年目のガイドボランティアを行っています。

◆◆ 日本語部門最終審査会 審査員 ◆◆

役 職	委 員 名	備 考
審査委員長	上 谷 順三郎	鹿児島大学教授
委 員	木 場 志 郎	南日本新聞社鹿屋総局長
委 員	伊 藤 太	鹿屋市立寿北小学校長
委 員	竹 崎 賢 一	鹿屋市立田崎中学校長
委 員	永 迫 昌 毅	鹿屋市立鹿屋女子高等学校長
委 員	川 原 武 敏	鹿屋市教育委員会指導主事

講 評（英語部門）

鹿屋市教育委員会 山内 誠

令和三年度から開始された平和の花束（英語部門）も三年目を迎えました。

鹿屋市では、英語教育「グローバル教育推進事業」に基づき、国立台北教育大学教育実習生受入れや台湾の小・中学校との協定に基づき、オンライン交流や対面交流を積極的に推進する中で、文化の「違い」や「共通点」を理解し合い、英語を使う必然性のある国際交流を続けております。「Think Globally, Act Locally」を掲げる鹿屋市の英語教育の目標は、コミュニケーション能力の育成によって、対話による平和な世界をつくるといった、共通言語とも言える英語という「言葉のもつ力」を明確に捉えたものです。

さて、令和六年度も台湾協定校からの多数の平和へのメッセージ応募がありました。平和への願いは、日本だけでなく、台湾、そして世界中に広がっていく可能性を秘めています。世界平和は、人類の共通の願いであり、協働して解決していくべき喫緊の課題です。ここ鹿屋の地から、平和へのメッセージが、英語で発信されることは、大変意義深いものがあると考えます。

今回英語部門最優秀賞を受賞した鹿屋市立串良中学校の市來寧子さんのメッセージには、大叔母から実際に伝え聞いた戦争体験が、教科書に書かれた歴史の事実を、よりリアルで想像的なものにし、ふるさとである鹿屋市の戦跡や特攻隊員、そしてその方々を見送らなければならなかった人々の思いにまで意識を向けるなど、聴衆に解決のための行動を促す表現が効果的に用いられています。

また、台湾部門で最優秀賞を受賞したジェームス・ユーチエン・ウーさんは、「VRヘッドセット」をつけて入り込んだ「ハリー・ポッター」という物語の世界を見事に平和と関連付け、多面的・多角的に平和を見つめる機会を創り出しています。「VRヘッドセット」を外し、感じた「風が運ぶ花の香り」、「鳥のさえずり」といった現実世界に穏やかで、安心感のある平和な未来への希望を感じさせる対比的な表現が見事に聴衆を惹きつけるものとなっています。

最後に、「平和の花束（英語部門）」という本来の英語教育の目的を踏まえた価値ある取組が、今後グローバル教育推進事業とシンクロしながら、進展していくことを願っています。

◆◆ 英語部門最終審査会 審査員 ◆◆

役 職	委 員 名	備 考
委 員	ジャン ダイソン	鹿屋市地域活力課（国際交流員）
委 員	イナモリ イズミ	鹿屋市 A L T
委 員	山 内 誠	鹿屋市教育委員会指導主事

「平和へのメッセージ」

スタジオ録音体験バスツアー

令和6年8月24日（土）に、受賞者と鹿屋市内各学校の代表児童生徒が、MBC南日本放送ラジオスタジオ（鹿児島市）で、平和へのメッセージを収録しました。

実際にラジオ放送で使われているスタジオで、プロの指導を受ける大変貴重な体験となりました。

また、収録後は、黎明館（鹿児島市）で開催された「イマージブ体感 動き出す浮世絵展」の見学にも行きました。

収録された平和へのメッセージを、是非聞いてください。



【平和へのメッセージをMBCラジオで放送】

「平和へのメッセージコンテスト」最優秀賞、鹿屋市内各小・中・高等学校代表者の平和へのメッセージを児童生徒自らの朗読で放送します。

☆ 放送期間：令和6年10月 ～ 令和7年7月

☆ 放送時間：毎週木曜日 12:55 ～ 13:00



「平和について考える」

鹿屋市から飛び立った特別攻撃隊
鹿屋市の学校での平和学習

鹿屋から特別攻撃隊として
飛び立っていった若者たち



特別攻撃隊とは

鹿屋市は、第二次世界大戦中に特別攻撃隊が多く出撃した場所として知られています。

特別攻撃隊は、主に太平洋戦争末期に、日本軍の巻き返しを図るため、航空機などで敵の艦船に体当たり攻撃を行い、大きな損害を与えることを目的に作られた部隊のことです。

この攻撃により、多くの有能な若者が亡くなりました。鹿屋では、鹿屋基地から九百八名が、串良基地から三百六十三名が出撃し、千二百七十一名の多くの尊い命が失われました。



特別攻撃隊が残した遺書

お母さん、いよいよ最後の花を咲かす日が来ます。
私も笑って行きます。
すべて御国の為です。ですから何も
言わないで下さい。
今度会う日靖国神社で立派に
咲いた花の下です。
良くやったと泣かずに、にっこ
り笑ってください。
私も皆の健康を何時迄も何時
迄も祈っております。
では御元気で

今日あるを、かねて覚悟の
あずさ弓

敵の母艦に真一文字

四月六日

お母さん、いよいよ最後の花を咲かす日が来ます。

私も笑って行きます。

すべて御国の為ですから何も言わないで下さい。

今度会う日靖国神社で立派に咲いた花の下です。

良くやったと泣かずに、にっこり笑ってください。

私も皆の健康を何時迄も何時迄も祈っております。

では御元気で

今日あるを、かねて覚悟の

あずさ弓

敵の母艦に真一文字

四月六日

平和の尊さをいつまでも忘れないために

小塚公園戦没者慰霊塔

鹿屋基地から特別攻撃のために出撃していった若者たちの御霊を祀り、平和の尊さを後世へ伝えるために、一九五八年（昭和三十三年）に建立された慰霊塔です。

特別攻撃隊員たちの最後の地となった鹿屋基地を目前に臨む小高い丘の上に建てられました。塔には、一九四五年（昭和二十年）三月十一日から六月二十六日までに出撃した九百八名（陸軍十七名も含む）の隊員たちの名前が刻まれています。慰霊塔の周辺は、小塚公園として整備されており、市民の憩いの場となっています。現在は、毎年四月第一週の土曜日に戦没者追悼式を行います。



串良平和公園慰霊塔

串良基地から特別攻撃のために出撃していった若者たちの御霊を慰めるために、一九六九年（昭和四十四年）に建立された慰霊塔です。

第二次世界大戦末期に教育航空隊として開隊され、約五千名の飛行予科練習生が航空機の整備、搭乗、通信等の訓練を受けたところです。昭和二十年三月一日から特別攻撃隊の基地となり、終戦までの半年間に特別攻撃隊の三百六十三名、一般攻撃隊二百十名の最期の地となりました。

現在は、毎年十月中旬に追悼式を行っています。



鹿屋市立小・中学校での平和学習(総合的な学習の時間の取組)

〔1〕鹿屋市立寿北小学校 第5学年

【平和について考えよう】

鹿屋市の戦争の歴史を通して、平和のために自分ができることを考え、行動する力を育てる。

学習の概要(全21時間)

1 「平和」についてグループで意見交換をする。



2 鹿屋航空基地史料館で情報を集める。



3 図書やインターネット等で調べる。



資料：戦跡を旅する

発行：鹿屋市ふるさとPR課

https://www.city.kanoya.lg.jp/documents/743/senseki_panfu.pdf

4 調べたことを発表する。



5 「平和へのメッセージ作文」を書く。

かのや未来創造プログラム「平和の花束」実行委員会主催が募集している作文

児童の感想

- ・ 鹿屋から、たくさんの人々が特別攻撃隊として飛び立っていったことを知った。この戦争の歴史を忘れないようにしたい。
- ・ 今、戦争をしている国もある。世界で起きていることを、もっと知りたい。
- ・ 今の暮らしができるのは、当たり前のことではない。これからも平和な世の中になるよう、相手の気持ちも考えて行動していきたい。

【鹿屋市立寿北小学校】

児童数：834人

学級数：37学級

http://www.edu-kanoya.net/edu/kotobukikita_es/index.html

鹿屋市立小・中学校での平和学習(総合的な学習の時間の取組)

〔2〕 鹿屋市立串良小学校 第6学年

【平和な未来を創造しよう】

鹿屋市の戦争の歴史から、平和の大切さについて気づき、平和について貢献していこうとする態度を育てる。

学習の概要(全16時間)

- 1 串良町戦没慰霊碑(串良支所)を見学する。



- 2 バスで鹿屋市の戦跡の見学を行う。



- 3 鹿屋航空基地史料館で情報を集める。

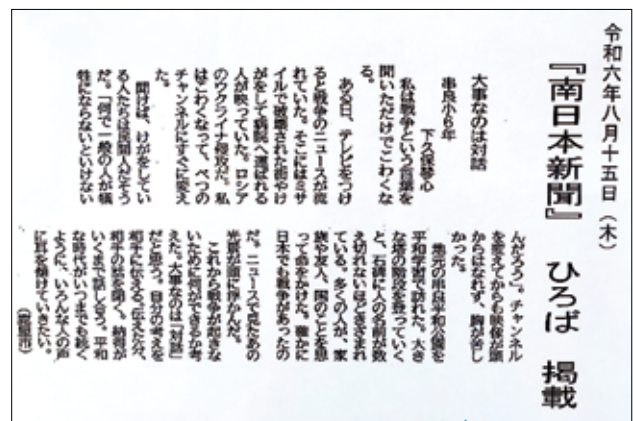


- 4 平和ガイドの方へインタビューをする。



- 5 図書やインターネットで調べる。

- 6 調べたことを作文にまとめ、新聞へ投稿する。



令和6年8月15日(木)
南日本新聞「ひろば」に掲載

児童の感想

- ・ 学校の近くにある慰霊碑をただ通り過ぎていたけど、たくさんの人の思いが詰まったものだったということを知った。
- ・ 歳の近い子どもたちがたくさん亡くなったことを知り、胸が苦しくなった。多くの犠牲と戦後の日本を復興のため支えてきた人々のおかげで、今がある。今を大事に生きようと思った。

【鹿屋市立串良小学校】

児童数：202人

学級数：9学級

http://www.edu-kanoya.net/edu/kushira_es/index.html

鹿屋市立小・中学校での平和学習(総合的な学習の時間の取組)

[3] 鹿屋市立吾平中学校 第2学年

【平和の尊さについて考えよう】

鹿屋市と長崎市の戦争の歴史を通して、戦争と平和について自分の意見を持ち、日常生活において平和を意識した行動を行う態度を育てる。

学習の概要(全27時間)

1 バスで鹿屋市の戦跡の見学を行う。



2 鹿屋航空基地史料館で情報を集める。



3 平和ガイドの方の話を聞く。



4 修学旅行で長崎市の戦跡を見学する。



5 図書やインターネットで調べる。

6 学習発表会で戦争をテーマにした創作劇を行う。



生徒が作成した
平和祈念像の
モザイクアート

生徒の感想

- ・ 学習を通して、私たちは、今の生活を今まで以上に大切にしなければならないと思った。平和な生活が続くように、私たち皆で守っていききたい。
- ・ 平和の原点は人の痛みを知ることだ。平和の原点を知った上で、これからも「平和」を祈り続けていきたい。

【鹿屋市立吾平中学校】

生徒数：203人

学級数：8学級

http://www.edu-kanoya.net/edu/aira_jhs/index.html



ついでらくちんひ
B29 墜落地点の碑



くし ら へい わ こう えん い れい どう
串良平和公園慰霊塔



ち か こう だい いち でん しん しつ
地下壕第一電信室



きゅう だん やく こ だん こん あと
旧弾薬庫弾痕跡



かわ ひがし えん たい こう
川東掩体壕

鹿屋市の戦跡MAP

かの や こう ぐう き ち し りょう かん
鹿屋航空基地史料館

せん ぼつ しゃ い れい とう
戦没者慰霊塔
こ づか こう えん
(小塚公園)



おう か ひ
桜花の碑



しん ちゅう ぐん じょう りく ち ひ
進駐軍上陸地の碑



たか す あと
高須町のトーチカ跡



HYOGO
KASAI



KAGOSHIMA
KANOYA

あの空と つながる、 まちひと平和。

平和を願う交流の物語

HYOGO
HIMEJI



OITA
USA



KUMAMOTO
NISHIKI



空がつなぐ
まち・ひとづくり
推進協議会

戦時中に空でつながった、 地域の新たな交流。

太平洋戦争末期、加西市にあった姫路海軍航空隊、そして宇佐市にあった宇佐海軍航空隊では特別攻撃隊が編成され、若い隊員たちは集結した鹿屋市の基地から各地の若者とともに沖縄方面へ出撃していったのです。そんな旧海軍飛行場ゆかりの地として空でつながる地域が、未来に向けて平和ソールズム普及のための事業を行っています。



公式サイト

空がつなぐまち・ひとづくり推進協議会 事務局・兵庫県 加西市 TEL:0790-42-8700 FAX:0790-43-1800

*fuse_

鹿屋店 鹿屋市札元1-18-38
鹿児島店 イオンモール鹿児島 1F
都城店 イオン都城SC 1F

共同開発 ハピネス会

貸付不動産

〒893-0015

鹿児島県鹿屋市新川町132-1

TEL (0994) 41-3003

FAX (0994) 41-3009



会計・税務・監査・相続・事業承継・医薬・社福・農業支援・再生計画等トータルにサポート

風呂井誠公認会計士事務所

公認会計士 風呂井 誠

税理士法人 風呂井会計

代表社員 風呂井 敬 公認会計士 風呂井 誠

〒893-0037 鹿児島県鹿屋市田崎町709 電話 公認会計士事務所 (0994) 35-7711
税理士事務所 (0994) 44-5311(代)
www.kaikai-home.com/furoikaikai/ FAX (0994) 44-6514



防衛省・共済組合特約店
家電販売・OA 機器・工事・設備施工

株式会社 丸正電器商会

〒893-0011 鹿児島県鹿屋市打馬1丁目3番33号
(鹿屋裁判所前)

TEL (0994) 42-2753

FAX (0994) 40-2066

建設業(建築・設計・施工) 上谷田建設株式会社

一級建築士・一級建築施工管理技士

代表取締役社長 上谷田 浩 幸

鹿児島県鹿屋市寿2丁目14-35

TEL 0994-43-0020 FAX 0994-43-0231

携帯090-8411-9514 E-mail:k@kkk.name

損害保険, 生命保険, 資産運用など幅広くサポート
地域密着の一生のパートナー『何かあったら、J-ONE』

有限会社 J-ONE

損害保険ジャパン株式会社 代理店
SOMPOひまわり生命保険株式会社 代理店
アフラ生命保険株式会社 代理店
メットライフ生命保険株式会社 代理店

〒893-1101 鹿児島県鹿屋市吾平町上名7674番地4 TEL 0994-34-4032 FAX 0994-34-4198



在籍のファイナンシャルプランナーが
『鹿児島キッズマネースクールばらのまち校』
を運営しています



有限会社 コンフィアンス

〒890-0026 鹿児島県鹿児島市原良2丁目10番11号

TEL (099) 210-5524 FAX (099) 285-5888

E-mail: grouphomeharara@po2.synapse.ne.jp



株式会社 池田屋

〒893-0067 鹿児島県鹿屋市大浦町14042-4

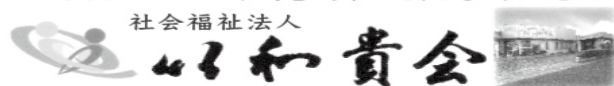
TEL 0994-44-4288 FAX 0994-44-4287

E-mail: cshudousan@po5.synapse.ne.jp

共に助け合い支えながら働ける職場

～子育てサポート「くるみん認定事業主」～

社会福祉法人



特別養護老人ホーム 以和貴苑

鹿屋市串良町細山田5902-3

☎(0994) 62-2430



鹿児島相互信用金庫

鹿屋支店 〒893-0014 鹿屋市寿5丁目2番44号
TEL 0994-43-3430 FAX 0994-43-3929

西原支店 〒893-0014 鹿屋市寿5丁目2番44号 (鹿屋支店内)
TEL 0994-44-5470 FAX 0994-44-5324

菓子工房 ボンヴィヴオン

〒893-0064 鹿屋市西原4-14-29 TEL (0994) 40-0011



おおすみ薬局

携帯 080-5255-4420

〒893-0015 鹿児島県鹿屋市新川町908番地

TEL 0994-36-8003 FAX 0994-36-8004

E-mail: ohsumi0601@po5.synapse.ne.jp

車の総合メンテナンス・アップル車検 有限会社 久永ボデー

代表取締役 久永 貴一

〒893-0021 鹿児島県鹿屋市東原町6914-3

TEL: 0994-44-5265 FAX: 0994-44-6942

フリーダイヤル: 0120-168-889



総合保険コンサルティング

株式会社グッドウィン

鹿児島支社 鹿屋オフィス

〒893-0023 鹿児島県鹿屋市笠之原町35-1

TEL 0994-40-3044

企画・広告業 株式会社 アット・アド

☎090-3016-4796

Mail godan.atad@gmail.com

office 〒893-0062 鹿屋市新生町20-5 オフィスオガワ205

鹿屋・大隅

学校に仕事にと頑張っている皆さん
車やトラック、趣味でバイクの免許取得
してみませんか？



まずはご相談を。
☎0994-43-2627

寿
kotobuki
Driving School

鹿屋寿自動車学校



お手伝いします♡

呼んであんしん、乗ってあんしん

黒いボディに青い行燈が目印です



QR・クレジット決済対応

スムーズな乗降で
快適にお送りいたします



タクシーのご用命は



鹿児島第一交通株式会社
鹿屋営業所

☎0120-
555-705

ホテル

太平温泉

〒893-0062 鹿児島県鹿屋市新生町 5-25
TEL 0994-44-3300 / FAX 41-4411 URL <http://www.taihei-onsen.com/>

世界に平和を、子どもたちに愛を！
文具・事務用品・教材・家具・コピー機・OA 機器



株式会社 六宝堂

〒893-0064 鹿児島県鹿屋市西原 4 丁目 10 番 20 号

電話番号 ▶ 0994-43-5626

FAX 番号 ▶ 0994-43-5646



有限会社 さつき

〒893-0013 鹿屋市札元 1-1-48

TEL 0994-44-4812

FAX 0994-36-4666



有限会社 カリヤ

・居宅介護支援事業所
(・YS マリ化粧品)

〒893-0132 鹿屋市下高隈町 5039 番地 31
TEL(0994)**36-8800** FAX(0994)**42-0895**

グループホーム 愛

〒893-0132 鹿屋市下高隈町 5039 番地 8
TEL(0994)**40-6100** FAX(0994)**40-6111**

デイサービスセンター 愛乃家 ・住宅型有料老人ホーム 愛

〒893-0132 鹿屋市下高隈町 5030 番地 2
TEL(0994)**43-6666** FAX(0994)**41-0086**

債務整理 離婚 遺言 一般法律相談
相続 交通事故

早川法律事務所

(平日) 午前 9 時～午後 5 時 30 分
法律扶助制度を利用した無料相談実施しております。
☎0994-45-6000 FAX0994-45-6001
〒893-0011 鹿屋市打馬 2 丁目 2 番 27 号

株式会社 園 幸

〒893-0005 鹿児島県鹿屋市共栄町22番20号
TEL (0994)**43-2488**
FAX (0994)**40-2488**



株式会社 サクラクレパス 鹿児島工場

鹿児島市吾平町麓2834-1
TEL:0994-58-6066 FAX:0994-58-6721

かのや交通株式会社

〒893-0055 鹿児島県鹿屋市野里町4876-5
電話 0994-41-0097 Fax 0994-41-0003

Honda Cars 鹿児島東

[鹿屋中央店] 鹿屋市笠之原町2038-1 [志布志店] 志布志市志布志町安楽2027-1
TEL (0994) 43-4193 TEL (099) 472-4590

株式会社 森 電気

代表取締役 森 裕志

工務部 電気設備工事 空調設備工事 水道工事 消防設備工事 土木工事



エディオン
モリ鹿屋東店

〒893-0023 鹿児島県鹿屋市笠之原町 5-65
TEL(0994)42-3644 FAX(0994)43-9051





鹿屋寿店 ☎0994-43-3505

東 開 店 ☎099-268-2200

まっすぐ、正直に。
たい かい
大湊酒造株式会社

鹿屋市白崎町21番1号

TEL.0994-44-2190

お気軽にご相談ください。

保険調剤・漢方相談 オガワ薬局

鹿屋市新川町132-1 TEL 41-3003 FAX 41-3009

健康で楽しい食生活



24時間営業店舗 ◆

◆旭	原	店	☎0994-40-1200
◆川	西	店	☎0994-40-4500
◆西	原	店	☎0994-40-3233
◆東	串 良	店	☎0994-63-3000
◆高	山	店	☎0994-65-7000
◆有	明	店	☎099-471-6060
串	間	店	☎0987-71-1866

※串間店は営業時間9:00～21:00

焼肉こだわり館 ☎0994-41-0081

※こだわり館は営業時間16:00～22:00



部活動のアピール!

学校自慢!

ユニーク先生!



THE TIME

あさ 5:20 ~ 8:00



鹿児島!

中高生ニュース

毎週 月・木 あさ 6:30 放送

リポーターは生徒!



MBC テレビ 朝の情報番組「THE TIME,」(月~金:あさ 5:20~8:00)。MBC では「THE TIME,」の中で、鹿児島の中学生・高校生のミニコーナー「鹿児島!中高生ニュース」を放送中! 頑張っている部活動や、えっ!と驚く学校自慢、人気の先生や地域との活動、そして「学校あるある」などを生徒がリポーターとなって紹介します。

放送後、HP・公式 YouTube に UP !

鹿児島中高生ニュース 🔍

紙だけじゃない!!

お客様の魅力を最大限に発揮するためにさまざまな形の商品をご用意しています。

定番の広告だからこそ人が動く動機につながります



看板

記念品や商品アイテムとして人気の高い商品です



マグカップ

Tシャツ、パーカーなどにプリントして宣伝効果を発揮



ウェアプリント

イベントに対応したアイデアうちわ



イベントうちわ

飾るだけで店舗イメージを演出 記念品にも



ノベルティグッズ

既製品のバッグなどにプリントができます



既製品各種プリント

「動画広告も見せたい」「スマホと連動してもっとたくさん情報を伝えたい」というときに



AR (拡張現実) サービス
・ホームページ制作
・デジタルサイネージ

オリジナルファイルが作成できます



クリアファイルプリント

タオルプリント



タオルプリント

のぼり旗・タペストリー



のぼり旗・タペストリー

会社イメージの宣伝力。移動しながらの宣伝効果が狙えます



カーラッピング

店舗の活気と情報を発信できる定番アイテム



のぼり旗・タペストリー

かのや未来創造プログラムー平和の花束 2024 ー

令和 6 年発行

発行：平和の花束実行委員会

〒 893-8501 鹿児島県鹿屋市共栄町 20 - 1

TEL 0994-31-1137 FAX 0994-41-2935
